

## プレゼンテーションⅢ「四旬節と復活節に行う信心」

市瀬英昭

### 1. 四旬節の場合－行列と断食に焦点をあてて

四旬節は復活祭に向けての準備期間。この典礼季節に、洗礼の恵みを想起し、信者としての生活を整えることが求められている。四旬節は、洗礼と回心という二重の性格を持っており（『典礼憲章』109他）、いつにもまして「からだ」をもって復活信仰（＝過越秘義）を表現し、また深めていく季節。

#### ①行列について－四旬節に特徴的なものの一つとしての「行列」（Procession）

「灰を受ける行列」「枝の行列」「聖体安置の行列」「十字架崇敬の行列」。復活徹夜祭の場合は、「光の行列」。これらは教会の公の典礼行為。なお、典礼と民間信心の関係がとくに重要となるこの「行列」については、「指針」245～247番に「行列」の種類と意義、留意すべき点について記述がある。

##### ・灰の水曜日

この日に特徴的なのは「ことばの典礼」の説教の後に灰の祝福と「灰を受ける行列」があること。週日に信者が教会に集うことが困難である場合、次に来る日曜日に開祭の一部として行う可能性がある。その時には、すでに水曜日の式で祝福された「灰」を使用するのではなく、その時点で信者の前で祝福されることが望ましい。それは祝福された灰自体に何かの魔力があるような誤った信心業を回避させるため。この式は復活との関連で理解されることが肝要。

##### ・受難の主日

「受難の朗読」を別にすれば、開祭の部に「枝の祝福」と「枝の行列」があることが特徴。この祭儀の強調点は、イエスのメシアとしてのエルサレム入城であって、枝と会衆の祝福は二次的なものであること。イエスの勝利は政治的、軍事的次元のものでない。祝福された枝は式後、各自が家に持ち帰り、次の年の「灰の水曜日」のために保存される。しかし、この祝福された枝自体に何かの効果があるとみなして、信心業に使うような誤用は避けるべき（138番）。「勝利のキリストとの関連」を見ること（139番）。

##### ・聖木曜日の晩餐のミサ

特徴的なことは、「洗足式」と「聖体安置の行列」、聖体の保存、viaticum（旅路の糧）、信心業としての聖体訪問、聖体礼拝、聖体行列などに関する健全な理解が必要。聖体に関するすべて信心業は「聖体拝領」との関連で理解されるべき。復活信仰がここでも前提となる。

##### ・聖金曜日の聖式

「十字架崇敬の行列」と「盛式共同祈願」が特徴。先取りとしての四旬節金曜日の信心業、「十字架の道行」の意義（133番）。「受難劇」－信心業のレプレゼンテーションと典礼とし

てのアナムネシスの違い (144 番)。「復活との関連」(134 番)。聖金曜日の復活断食 (『典礼憲章』110)。

- ・ 聖土曜日  
「復活断食は適当であれば、聖土曜日にも続行」(『典礼憲章』110)。
- ・ 復活徹夜祭  
「光の行列」の意義 (井上ひさし氏の恩師の言葉)。

②断食について－「断食」はキリスト者のこの世でのあり方を示す

- ・ 聖書的な背景をもつ行為。
- ・ 典礼的行為としては「神を待ち望む姿勢」－私たちの本当の飢え、渇きをいやすお方はキリストである、という信仰の「からだ」による表現。キリストの到来、再臨への「準備」と「待望」という二つの要素－終末論的な意義。
- ・ 断食は「祈り」とともになされ、また「愛の実践」へと向かう。
- ・ 見せるための断食ではない (マタイ 6・18、『エゲリア巡礼記』28 章)。
- ・ イエスの断食にならうことの意義は、創世記のアダム (創世記 3・1-24) と第二のアダムであるキリスト (マタイ 4・1-11) との対比から理解される。
- ・ キリスト者は、キリストの過越秘義への参与として断食を行う。

## 2. 復活節の場合－「入信の秘跡直後の導き」(ミスタゴギア)

①入信の秘跡との関連性

民間信心では、四旬節期間において「キリスト教入信の秘跡」との関連、また重要なテーマである「脱出」との関連が少なく、イエスの人間性の神秘に集中している、と述べているが (124 番)、これらのテーマは、復活節の期間の大切な課題。『成人のキリスト教入信式』で復活節中の「入信の秘跡直後の導き」が第三段階として大切にされる。「復活者との出会い」と「新生感」の重要性。

②復活の主日

- ・ 復活の主と母マリアとの出会い
- ・ 家庭の食卓の祝福、生命の象徴である卵の祝福
- ・ 花の祝福と信者への配布

③復活節

- ・ 家族の祝福
- ・ 光の道行
- ・ 神のいつくしみの信心

・聖霊降臨前の9日間の祈り

④聖霊降臨の主日

「宣教のための取りなしの日」として祝う（156番）。

⑤復活節の50日間の一体性についての確認。繰り返す「出会い」の体験。

3. まとめ

①「最も重要なものだけが重要なのではない」ーキリスト教信仰の中心は「イエス・キリストの過越秘義」。信心業は、この中心へ向けて方向づけられ、かつ、公の典礼とのつながりがしっかりと保たれているときに存在意義をもち、有効に機能する。教会の大切な遺産として位置づける必要がある。

②信心業が「癒し」に終わらず「救い」へとつながる行為となるように。

「癒し」が、(a)自然治癒的な仕方で回復を果たし、(b)自己完結的な傾向をもつものに対して、「救い」は、(a)上からの絶対的な力ー「イエス・キリストによるあがない」ーを必要とし、(b)人を他者に開かれた存在とすること、にその特徴がある。